平成３０年　実践事例集資料

研究主題

生きて働く知識・技能の習得を目指す国語科学習指導のあり方

～主体的・対話的で深い学びの視点から～

日立市立多賀中学校　前島　恵子

Ⅰ　はじめに

１　主題設定の理由

本校では昨年度、「課題解決型の学習指導の研究～主体的・対話的で、深い学びを目指して～」のテーマのもと、グループ活動の仕方や学習課題の立て方、生徒が主体的に取り組むための工夫を研究し、思考力・判断力・表現力を育むことについて一応の成果を得ることができた。しかし、一方で「思考力・判断力・表現力」を育む土台となる基礎基本の学習の習得が、不十分であることが課題になった。生徒がグループ活動で自分の考えが話せないことや、自分の考えが書けないことが課題となった。

また、新学習指導要領では、学校の教育活動の目的を「将来の予測が難しい社会において子どもたちの”生きる力”を育む」ことに定め、「未来を作り出していくために必要な資質・能力を確実に育む教育」と「未知の社会を生き抜く力を育む教育」という視点が与えられた。『身に付けるべき資質・能力』は、「生きて働く知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」の三つ柱が再整理された。これらを育むのが「主体的・対話的で深い学び」である

「生きて働く知識・技能」については、２８年中央教育審議会において、「各教科の個別の事実的な知識のみを示すものではなく、それらが相互に関連付けられ、さらに社会の中で生きて働く知識なるものを含むもの」とある。知識は習得するだけでなく、社会の中で活用できるものとして、新しい「知識・技能」を追求していく必要がある。本校の課題である基礎基本の学習を見直し、「生きて働く知識・技能」とはどういうものかを明らかにし、習得させることが本校の急務である。

そこで、本校の実態を踏まえ、知識の理解の質を高め、生徒の一人一人に「生きて働く知識・技能」の習得を図ることが、本校の課題と捉えた。また、そのために、これまでの研究を生かし、主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善を中心に据え、他の学習法や学習の習慣や約束事などの見直しをしながら課題に迫っていく。

国語科としては、「生きて働く知識・技能」について、次のように捉えた。

①「生きて働く知識・技能」とはどのようなものか
1(書くこと)目的や相手に応じた書きぶりができる。
2(話すこと、聞くこと）正確に聞き、取捨選択したり比較分類したりなどして整理しながら聞き、目的に応じた話しぶりがができる。
3（読むこと)全体を捉える、根拠と結論の論理、展開及び構造を捉えることができる。

②「生きて働く知識・技能を身に付けた姿」とはどのようなものか
1(書くこと)読んだ人が、その気になる、分かる、納得するような文章を書くことができる。
2(話すこと、聞くこと）聞いた人が、その気になる、分かる、納得するような話をすることができる。
3(読むこと)全体として何の話か説明できる。しかけ、伏線があり、なぜそうなるのかを説明できる。

③「生きて働く知識・技能を習得させるにはどのような手立てが必要か」「主体的・対話的で、深い学びでは、どのようにできるか」
1（書くこと）他の人に読んでもらい推敲してもらう、友達に評価してもらう。
2（話すこと、聞くこと）学習過程で他者評価をいれる。自己評価をする
3(読むこと)他の作品(コラム、雑誌、新書等）を使って、文章の構造を見つける。
なぜそうなのか説明できるようにする。正確な根拠をあげて自分の考えを導き出せる。

学校課題研究でのねらいを踏みながら、国語科として捉えたものを目指し、課題に取り組んでいく。

２　研究のねらい

主体的・対話的で深い学びの視点に立った授業改善を図ることや学習に向かう姿勢や態度を身に付けさせることで、生きて働く知識・技能の習得を図る。

Ⅱ　研究の仮説

（１）考えを深めるために質問したり根拠と考えを区別して聞いたり言語による見方を働かせれば、生きて働く知識・技能の習得を図れるであろう。

（２）グループ活動や形態を工夫すれば、一人一人の主体的で対話的な学習が図れるであろう。

Ⅲ　研究の内容　　学校全体として取り組み

１　授業の流れの統一　と掲示

授業で、課題を明確に持ち、何を学習したか振り返りを大切にするために、およその授業の流れを統一した。

また、授業の流れが生徒に視覚的に捉えられるように、プレートを作成し黒板等に掲示した。

	流　れ	ポイント
導入	○教師と生徒がともにこの時間の学習目標をはっきりもつ。 ○授業の見通しをもつ。	☆本時の授業の流れを「本時のメニュー」として掲示するなどして視覚化し、教師と生徒が共有する。 ☆黒板の課題を、青色の線で囲む。
展開	○生徒主体の、話し合う・活動する・調べる・実験をするなどの活動する場面。教師からは、主体的・対話的で深い学びになるように「しかけ」ていく。	☆生徒同士の話合いをできるだけさせる。「話合いのマニュアル」を活用する。
終末	○生徒自らが、自分の言葉でこの時間に学んだことを振り返る。	☆身に付けたいことに照らし合わせて自分の言葉で振り返りを書かせる。 ☆振り返りを交流する。教師はできれば黒板に書いて取り上げる。 ☆黒板のまとめを、赤色の線で囲む。

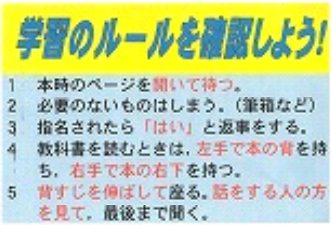
（２）　授業の約束を確認

「生きて働く知識・技能の習得」を目指す一方で、他の「思考力・判断力・表現力」「学びに向かう力・人間性」を関連づけ、バランスよくしていくのが大切であると考えた。そこで、学びに向かう態度・姿勢を身に付けるために、各小学校からの「授業の約束」を検討し、引き続き中学校で行うようにした。

学習のルールを確認しよう

１　本時のページを開いて待つ。
２　必要のないものはしまう。（筆箱など）
３　指名されたら「はい」と返事をする。
４　教科書を読むときは、しっかり手で持つ。
５　座り方、姿勢、態度に気をつける。（話中話禁）

〔掲示物〕



（３）　グループ・ペア活動のしかたを掲示する

一昨年のものだが、「対話的で主体的な、深い学び」を目指し、ペア・グループ活動について約束を掲示した。

『深い学び』のためのグループ・ペア活動５箇条

１　話し合いの目的を確認しよう。
２　相手の方を向いて話そう。
３　自分の考えが伝わるように話そう。
４　「うなずく」、「一言添える」など、反応しながら聴こう
５　相手の考えと自分の考えを比べ、伝えよう。

Ⅳ　実践事例　１学年の取り組み

第１学年４組　　国語科学習指導案

指導者　菊池　具美

１　単元　　会話が弾む質問をしよう

２　単元の目標

⑴　会話が弾む質問をすることに興味をもち、活動に意欲的に取り組もうとする。
（国語への関心・意欲・態度）

⑵　話の内容が深まったり広がったりするような、よりよい質問をすることができる。
（話すこと・聞くこと）

⑶　語句の文脈上の意味に注意し、語感を磨くことができる。
（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

３　単元について

⑴　教材観

中学校に入学し、新しい生活が始まったばかりの１年生にとっては、学習や生活を充実させるために「聞く力」を身につけさせることは、たいへん重要である。「聞く力」は、ただ相手からの情報を受け取るだけの受け身の力だけではなく、分からないこと、理解できないことを質問する力も、だいじな「聞く力」である。本教材では、ゲーム形式の学習を取り入れ、一人一人が質問者となる。生徒たちが「なぜ、そう思ったのか」「どんな様子か」など、相手とのコミュニケーションを重視し、その話題について深めたり、広げたりするようなよりよい質問をすることを主眼とした。さらに、友達と自分とにどんな共通点、相違点があるかを考えながら聞くこと（Ａ話すこと・聞くこと）で、相手に興味をもって聞く態度を育み、「聞く」ことへの意識を高めるのに最適な教材と言える。

⑵　生徒の実態（２９名）

「話すこと聞くこと」のアンケートによると、「友達の話を最後まで聞く」ことや「自分の考えを話す」ことなどは、多くの生徒ができると回答している。一方、相手の話に興味をもち会話が弾むような質問をしたり、友達の話を聞くとき会話が続くように適切に反応して聞くことができると回答した生徒が半数に満たないところが課題であると言える。そこで、身近な話題について対話する場を設定することで、友達を紹介するのに有効な質問をしながら充実した会話ができる生徒を育てていくことが急務である。

１友達の話を最後まで聞くことができる	■ 25 人	□ 4 人
２自分の考えを話すことができる	■ 20 人	□ 9 人
３人の話を聞くとき、適切に反応して、聞くことができる	■ 15 人	□ 14 人
４相手の話に興味をもち、質問することができる	■ 12 人	□ 17 人

■そう思う　□どちらかというとそう思う

［平成３０年５月２３日　１年４組　話すこと聞くことアンケート］

⑶　指導観

国語科では、「話すこと聞くこと」における「生きて働く知識・技能を身につけた姿」を、「正確に話を聞き、内容を整理して取捨選択し、目的に応じた話しぶりができる生徒」ととらえた。本単元では、質問した相手がどんな考えをもった人物なのか、また、自分の考えとの共通点や相違点を整理して、質問者がメモを見ながら紹介できる生徒を、「生きて働く知識・技能を身につけた姿」とする。「聞く」ということは、ただ漠然と聞けばよいわけではなく、相手の話に興味をもって質問したり、聞いたことを自分の考えと比べたりすることが大切である。また、会話を弾ませるためには、相手が関心をもっていることを引き出したり、自分が相手の話で興味があることを質問したりすることが肝要であることに気づかせたい。

そこで本時では、4 人グループで、質問者・回答者・記録係・時計係の役割分担をし、それぞれがすべての役割を体験するなかで、「回答者」の人となりを引き出すために有効な質問とはどのようなものかに気づくよう、目標をもって学習に主体的に取り組めるようにしたい。

４　指導計画（２時間扱い）

時間	学習活動	評価規準【評価方法】
1 (本時)	○学習の見通しをもち、計画を立てる。 ○質問ゲームに取り組み、よりよい質問について話し合い、発表する。	・会話が弾む質問をすることに興味をもち、活動に意欲的に取り組もうとしている。　【ワ、観】⑴ ・質問しながら聞き取ったり、メモを取ったりしたうえで、よりよい質問について考えている。　【ワ、発】⑵
1	○よりよい質問を意識して会話をする。 ○グループで友達を紹介し合う。 学習を振り返る。	・話の内容が深まったり広がったりするような、よりよい質問を意識しながら会話をしている。　【ワ、発】 ・自分との共通点や相違点を考えメモ整理し紹介している。【ワ、発】⑵⑶

5　本時の展開

⑴　目標

よりよい質問を意識しながら会話し、質問して分かったことをもとに友達を紹介することがで　　きる。

⑵　準備・資料

ヒントカード、係分担カード、ワークシート、ストップウォッチ

⑶　展開　　話合い活動　　◎生きて働く知識・技能の習得のための手立て

学習活動・内容	指導上の留意点・評価（○評価）
1　本時の学習課題を確認し、学習の流れをつかむ。 会話名人をめざそう。	・前時の学習で会話が弾んだ質問や会話が広がらなかった質問について振り返らせることにより、本時の活動にスムーズに入っていけるようにする。
2　話合い活動のバッドモデルを教師が示す。 3　よりよい質問を意識して、会話をする ⑴　４人グループを作る。 ⑵　質問者、回答者、時計係、記録係を決め、ルールを確認する。 ・質問者…理由を問う質問を３回以上する。 回答者が具体的に述べられるような質問を１回以上する。 大切だと思うところは自分でメモをとる。 ・回答者…直接の回答以外のことも述べてよい。 答えにくい質問には「パス」と言える。 ・時計係…２分間の「始め」と「終わり」の合図をする。 内容や気づいたことについてメモをする。 ・記録係…会話のメモを取る。 【予想される生徒の反応】 ・「はい」「いいえ」で答えられる質問 ・「何・いつ・どこで」」などの質問 ・「なぜ」と問うことができた質問	・話合い活動のバッドモデルを教師が示すことにより、よい話合い活動のルールを確認できるようにする。 ・意図的なグループにすることで話合い活動が活発に行えるようにする。 ・２分間ずつ交替し、全員がすべての役割を体験することで、意欲的に活動できるようにする。 ◎「はい」「いいえ」で答えられる質問だけでなく、「どのように～したのですか」「例えばどんな～ですか」のような理由やエピソードなどを引き出す質問をするよう助言する。 ・その人の人となりを紹介するための質問となるよう助言を与える。 ◎意味が分かりにくいところや確認したいこと、自分が興味を持ったこと知りたいことについて「なぜ」「どうして」という質問を３回以上することにより、グループで活発な話合いができるようにする。 ・キーワードを中心にメモをとるよう伝える。 ・質問がなかなか続かない生徒には、ヒントカードを提示し積極的な活動ができるようにする。
4　メモをもとに、グループで友達を紹介し合う。 ・聞いて予想通りだった回答 ・意外だった回答 ・自分（質問者）と似ている点、違う回答 ・会話の中の答えでその人らしさが表れていると思う回答 ・時計係と記録係だった二人に、回答者を簡単に説明する。	・肯定的な紹介になるよう助言する。 ○自分が質問者として取ったメモに感想や考え、自分との共通点や相違点などを書き加え友達を紹介することができたか。 【ワークシート、観察、発表】 ・回答者を紹介するのに何をどのような順序で話すかを考えて、メモに数字や記号などを書き込むよう助言する。 ・回答者の考えや人柄などが伝わったと感じた質問をもとに、グループの中で紹介するよう助言する。
5　本時の学習を振り返り､次時の確認をする。	・質問して分かったことをもとに友達を紹介できた生徒を意図的に指名し発表させることにより、本時の学習で身に付けた力について再確認できるようにする。

6　ワークシート・資料など

資料１

会話が弾む質問をしよう

会話名人をめざそう（質問者用）

１年　組　番氏名

・「なぜ～ですか。」…３回以上使おう。
・「～についてもっと教えてください。」
・「どのように～したのですか。」
・たとえばどんな～ですか。」　１回以上使おう
＊大切だと思うところは、メモを取ろう。

質問者	回答者

質　問	回　答

【友達を紹介するポイント】会話の中から次の点を探そう
＊聞いて予想通りだった回答
＊意外だった回答
＊自分（質問者）と似ている点、違う点と感じる回答
＊会話の中の回答でその人らしさが現れていると思う回答

資料２

会話が弾む質問をしよう

会話名人をめざそう（時計係・記録係用）

１年　組　番氏名

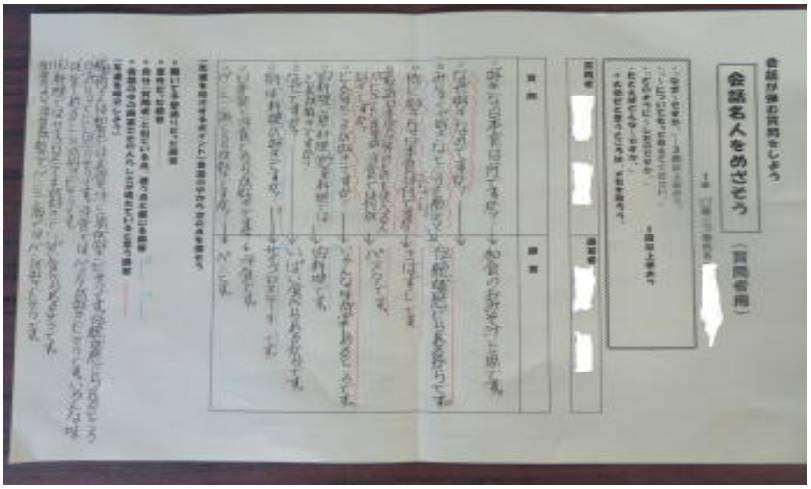
質問者	回答者
時計係	記録係

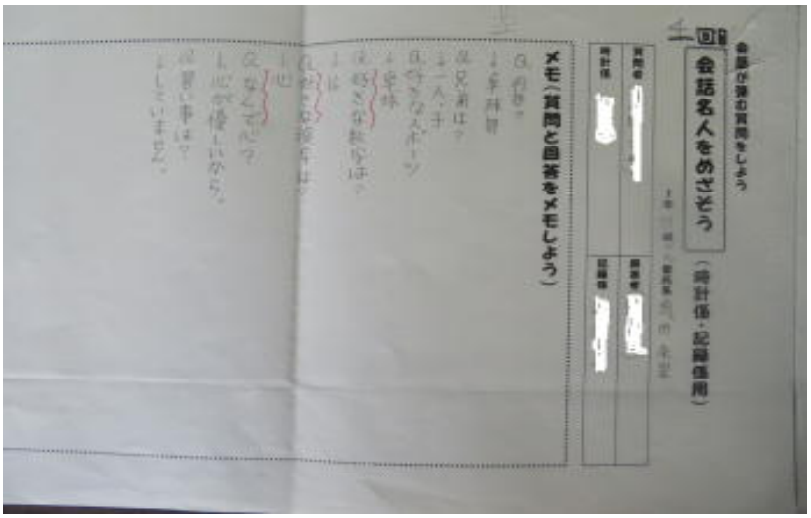
メモ（質問と回答をメモしよう）

7　指導の実際

・導入で、話合い活動のバッドモデルを教師が示すことで、話すときや聞くときのしかたを意識させた。本校の「学習のルール」や「『深い学び』のためのグループ・ペア活動５箇条」を用いて、話すときは聞き取りやすい声の大きさを意識する、話

を聞くときは相手の方をみてうなずいたり相づちをうったりするなどでも確認したため、話合いの場面での友達の発言をうなずいて聞くという意識が高まった。
・一人一役を与え、全員が質問者や回答者になっていく設定だったため、質問や回答への関心が高まり「自分ごと」ととしての捉えができていたと思われる。また、グループを意図的なグルーピングとしたため、生徒一人一人が役割をもち、主体的に取り組んでいた。
・会話が弾んだ経験や会話が広がらなかった経験がなかったか、自分の生活を振り返えさせることを踏まえての体験だったので、生徒は自分の持っている知識・技能をフル活用して活動していた。また、質問して分かったことをもとに友達を紹介することにより、よりよい質問とはどのようなものか振り返ることができた。





資料３
「生徒のワークシート」

Ⅴ　２学年での指導　〈話すこと聞くこと〉

第２学年１組　国語科学習指導案

指導者　前島　恵子

１　単元　　複数の考えを聞いて、自分の考えを伝えよう

２　単元の目標
（１）問題意識を持って、相手の話を聞くことに積極的に取り組もうとする。
（関心・意欲・態度）
（２）表現の仕方や根拠の確かさに注意して聞き、自分の考えを広げることができる。

（話すこと・聞くこと）
（３）根拠と考えを表す文の構成に気をつけて、相手の話を聞くことができる。
（伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項）

３　単元について
（１）教材観
　さまざまな情報にあふれる生活の中で中学生も数多くの情報に触れる機会は多いが、その中で自分　の考えを形成することが重要である。そのためには、情報が正しいかどうか意識することとその根拠　を捉えることが大切である。話を聞くときにも、どんな根拠を元にしているか、その根拠は正確なの　かを考えながら聞くことが求められる。
　国語の聞くことの学習で、主観と客観の表現の違いを知るこ　とと、考えと根拠を表す「文の構成」を知ることは、日常生活や他の学習においても情報を表面的で　はなく根拠をもとに捉えるために不可欠である。
（２）生徒の実態
　本学級の生徒は、集中して話を聞く様子がある。アンケートによると「しっかりと最後まで話を聞く」「話や意見を、理由まで聞くことができる」と答えた生徒は多い。１月に実施した県学力診断テストにおいて「話の内容を適切に聞き取る力」を問う問題でも良好な結果が得られた。しかし、「自分の考えをよく話す」についてはあまりできないと答えた生徒とが多く、自分の考えを持つことはできるものの考えを話すことはあまりできないという意識がある。そこで、話すことにつながるように、根拠を正しく捉え、根拠を吟味することで、自分の考えを広げ自身をもって話ができるようにさせる。

話すこと聞くことについてのアンケート
（４よくできる、３まあまあできる、２あまりできない、１努力が必要）
１話を最後までしっかり聞くことができる。
　４、１９人　３、１４人　２、０人　１、１人
２人の話や意見を、理由まで聞くことができる。
　４、１５人　３、１２人　２、７人　１、０人
３人の話や意見に対して、疑問を持ったり自分の考えを持ったりする。
　４、１１人　３、１７人　２、５人　１、１人
４　自分の考えを、よく話す。
　４、８人　３、１６人　２、９人　１、２人
５　グループでの話合い活動を活発にできる。
（２年１組３４人　平成３０年５月２１日実施）

（３）指導観
　国語科では「知識・理解を習得した」生徒の姿を「正確に話を聞き、内容を整理したり比較したり　して、目的に応じた話しぶりができる生徒」と捉えた。本単元では、自分の考えを話すために、事実　と主観の違いを聞き分ける学習、考えと根拠を区別して聞き取る学習、考えと根拠を吟味する学習を　段階的に行い、聞き取ったことをもとに自分の考えを形成させる。主観の混じった言葉とはどういうものか知ることや、事実と根拠を文の構成から捉えることを丁寧に行い、吟味することにつなげる。特に、根拠と考えの構成の例をいくつか示し、知識を身に付けてから聞き取る練習をさせていく。自分自身の考えを持つためにはどのように聞いたらよいかと考えさせながら取り組ませたい。
　本時では、二つの意見を聞き、根拠の確かさについて吟味し、質問したり自分の考えを述べたりで　きるようにしていく、そのためには、前時までの考えと根拠の聞き取り方をくり返し行う。根拠の確かさについても、主観がある言葉ではないか詳しく説明するべきではないか等視点を与える殊で、吟味できるようにさせる。また、生徒が主体的にできるようにグループでの話合いや交流活動を取り入れ、生徒が様々なものの見方に触れ、自分の考えを確かめたり広げたりすることができるように工夫　したい。
４　指導計画

時間	学習活動	評価規準【評価方法】
1	○課題を持ち、これからの学習計画を立てる。 ○事実と主観との違いを知り、聞き分ける。	・課題をつかみ、学習の見通しを持っている。【観】（1） ・主観が表れている表現とそう考えた理由を話そうとしている。【観】（2）
1	○事実と根拠を文の構成に気をつけて聞き取る。 ○主観が混じっていないか、具体的かなどに気をつけ、根拠と考えを吟味する。	・文の構成に気をつけて聞いている。【観】（3） ・考えや根拠について、吟味しようとしている。【観】（2）
1 本時	○複数の発言を考えと根拠に区別して聞き取り、それぞれの考えや根拠について吟味する。 ○吟味したことをもとに自分の考えをもちその理由を発表する。	・話を聞いて根拠と考えを正しく捉え、吟味している。【観】（2） ・吟味したことをもとに自分の考えとその理由を述べている。【観】（2）

5　本時の展開

（１）目標

・自分の考えを発言するために、複数の意見から考えと根拠を聞き取り、根拠を吟味することができる。

（２）準備・資料

・ワークシート　・掲示用資料　・CD　・学習カード

（３）展開　話合い活動　　◎生きて働く知識・技能の習得のための手立て

学習活動・内容	指導上の留意点・評価（○評価）
1　本時の課題と、学習内容を確認する。 複数の意見を聞いて、どちらに賛成か客観的に判断し、自分の考えを話そう。 2　「コンビニエンスストアの夜間営業は自粛するべきかどうか」についてのＡとＢの意見を聞き、考えと根拠を捉え、吟味する。 （１）考えと根拠を区別しながら聞き取り、メモを取る。 （２）考えと根拠を確認する。 （３）ペアでＡとＢそれぞれの考えと根拠を吟味し、質問や反論を考える。 (吟味のポイント) ・根拠に主観はないか。具体的に書かれているか。詳しく調べるべきことはないか。同意できないことは何か。 ・根拠から考えに正しく導かれているか。 〔予想される生徒の反応〕 Ａに対して…夜間に使う人が少ないとあるが、実際はどのくらいなのか。 Ｂに対して…夜間営業することでコンビニが襲われることはないのか。照明の電気の方が少ないののはどのくらいの差があるのか。	・本時の活動の流れを掲示し、本時の目標と見通しを持たせることによって、主体的に学習に取り組めるようにする。 ・自分の考えを発言できるようにするためには、客観的で根拠にもとづいた考えが必要である。本時は二つの意見を聞いて判断できるように、前時までの学習をいかし工夫して聞くように伝える。 ・メモを取るときには、簡潔にし、二つの意見と根拠を比較しやすいように書くよう助言する。 ◎考えと根拠の関係を示して文の構成を示し、区別ができるように助言する。 ◎前時に出てきた主観の表れた言葉を示し、吟味に生かせるように助言する。 ・主観がある表現、もっと詳しく調べた方がいいところ、考えへと正しく見耳鼻枯れていないところを挙げさせ、それを質問したり反論したりするように助言する。 ○意見を聞き取り、考えと根拠を捉え、吟味することができたか。【観察】
3　自分の考えとその根拠を発表する。 （１）自分の考えはＡＢのどちらに近いのかとその根拠を考えて、メモを取する。 私の考えは○さんに近いです。なぜなら、～からです。 （２）グループで発表しあい、感動を述べる。 （３）クラスで交流する。	・吟味したことをいかし、根拠をもち客観的に考えるように助言する。 ・話し方の型を示すことによって、自分の考えと根拠が言えるようにする。 ○吟味したことをもとに。自分の考えと根拠を述べることができたか。【観察】
4　本時の学習を振り返る。 〔予想される振り返り〕 ・複数の意見を聞いて自分の考えを持つためには、考えと根拠を捉え吟味してから考える。 ・自分の考えを持つためには、吟味したことをいかす。 ・根拠や考えを吟味知るためには、主観的な内容になっているか、具体的になっているかなどを考える。	・学習カードに本時のまとめを自分の言葉で書けるようにする。なかなか書けない生徒には、書き始めを示し、続きをまとめるように支援する。 ・異なったまとめをした数人を意図的に指名し、学級全体で本時の内容が確認できるように支援する。

6　ワークシート・資料

資料４

根拠を吟味するために

二年（　　）組（　）番　氏名（　　）

①　文の構成に気をつけながら、考えと根拠を捉えよう。

重要ポイント
根拠を先に述べてから考えを言う場合と、
まず考えを先に述べてから根拠を言う場合がある。

根拠に当たる部分に　〰〰〰　を引いてみよう。

㋐ 動物を好きな人に悪い人は絶対いない。だから、動物好きの馬場さんは悪い人ではない。

㋑ 由実さんは僕のことを嫌いにちがいない。だって、バレンタインデーに何もくれなかったもの。

②　根拠の正しさを吟味するよう。

重要ポイント

☆吟味とは（　　）

☆根拠と考えを吟味するために

①根拠そのものが正しいか。

②根拠から考えが適切に導　かれている

㋐ 根拠（　　）
吟味
考え（　　）

㋑ 根拠（　　）
吟味
考え（　　）

資料５

複数の考えを聞いて、自分の考えを伝えよう

メモを取り、**考え**と**根拠**と区別しながら聞く。

【全体で書く】

Aさんの意見	Bさんの意見

考えと根拠（除く）の関係を吟味する

吟味のポイント

参考にしよう

○疑問に思ったことを詳しく調べなければならないと思ったこと

○賛成できないこと

Aさんの意見	Bさんの意見

7　指導の実際

・単元を通して、主観的な表現と事実を伝えている表現を区別することを学習してきた。前時においては、プリントを用いて、根拠と考えを聞き分けるために文の構成における「事実」と「考え」について学習した。また、根拠と考えを吟味する学習をした。本時でも、それらを確認しながら授業を進めた。
・全体として聞き取ることはできるものの、根拠と考えを区別することに対しては、考えを聞き分けることに苦労する生徒が多かった。そこで、確認をする時間が多く必要となった。
・考えと根拠と吟味することでは、吟味のポイントに沿って、具体的に書かれていないことや数値を使って詳しく述べたほうがいいことなどを、挙げることができた。
・最終的に、どちらの考えに近いか自分の考えを話すことができた。吟味したことからどちらの考えにも納得できずに、なかなかどちらの考えに近いか決められない生徒もいた。

Ⅵ　研究の成果

1　仮説１について

国語科では、「話すこと聞くこと」における「生きて働く知識・技能を身につけた姿」を、「正確に話を聞き、内容を整理して取捨選択し、目的に応じた話しぶりができる生徒」ととらえた。１学年の実践から、質問には、「はい」「いいえ」で答えられて答えが一つに定まる「閉じた質問」と「はい」「いいえ」で答えることが難しく、答えに説明を要する「開いた質問」がある。回答者にとってよい質問となるよう、回答者があまり意識していなかった回答者自身の肯定的な側面を引き出す質問をするために理由やエピソードなどを問うよう指示した。例えば、「なぜですか」と理由を問う質問を〇回以上使うことや、「たとえばどんな　～　ですか」のように具体を求める質問である。この活動を通して、相手への理解が深まり、自分との共通点や相違点に新しい発見もあることと考える。質問を楽しむゲーム感覚での学習を通して、質問のスキルを高めることができたと考える。

２学年の実践からは、自分の考えを深めるためには、正確に話を聞きとり考えと根拠を区別する学習に取り組んだ。生徒は、始めに学習した文の構成や文末表現など、聞き取る言葉に敏感になっていた。自分の考えをもつためには、ただ聞くだけでなく根拠の正しさや客観性を確認していくことが重要と、実感を持つことができたと思われる。これから、授業や日常において繰り返していくことが重要である。

2　仮説２について

１学年では、グループ内で一人一役を与え、全員が質問者や回答者になっていく設定とした。１グループは４人とし、グループ内に必ず話合いのリーダーを置く意図的なグルーピングを行った。そのため、リーダーを中心に話合い活動が活発に行われ、話すことが苦手な生徒も友達の発言を聞いて自分の質問や回答に生かすなど主体的で対話的な学習が図れた。

２学年では、グループ活動は、吟味するときに、様々な意見が出やすい４人で行った。また、自分の考えを述べるのも、グループ活動で行った。安心して話せる雰囲気で、聞いた感想を述べ合うことができた。

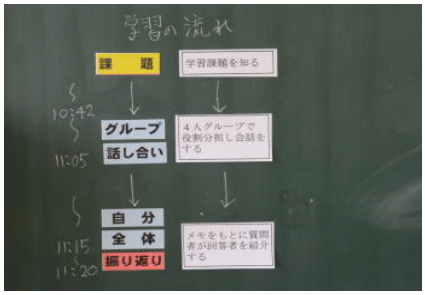
3　今後の課題

１学年では、学習課題については、生徒にとって学習する必要性を感じるような魅力的な学習課題を提示する必要がある。本時では、「会話名人になろう」というやや漠然とした課題提示であったので、目的意識をもって話したり聞いたりできるようより明確で具体的な学　習課題を提示していきたい。

展開では、その人の人となりが発見できるよう「理由を問う質問を３回以上すること」「回答者が具体的に述べられる質問を１回以上すること」というルールを設けたが、話すことを苦手としている生徒の中には、「なぜ　～　ですか」のみに終始してしまったり、ルールをこなすことにのみ集中してしまい、会話がうまくつながらなかったりする場面もみられた。また、質問者や時計係にメモを取る役割も与えたが、メモを取ることに時間を割いてしまい、よりよい質問へと深められないことがあった。今後は、聞いたことを正しく理解し、キーワードを中心に箇条書きで書き取り、番号や記号などを用いて内容を整理しながらメモを取るということを、国語科の学習の中ではもちろん、他の教科や生活の様々な場面で活用していく必要がある。

終末で、メモをもとに質問者が回答者を紹介する活動を取り入れた。よりよい質問を効率的に行えた生徒は、感想や考え、自分との共通点や相違点などを中心に紹介することができた。しかし、メモは取れたが友達を紹介する文を書くことに時間がかかる生徒もみられ、時間の確保が難しかった。

２学年では、吟味した結果を生かし客観的な考えを持つことを課題の一つにしたが、自分の意見に、吟味して十分ではないと判断した曖昧な根拠をそのまま取り入れる生徒がいた。せっかく吟味したことを生かす態度や、吟味する意識を、これからも自分の情報に見るときに取り入れることが、知識・技能の習得にとって大切であろうと思う。
考えと根拠を区別して聞くためには、言葉一つに集中して聞き、言葉のささいな使い方の違いに着目して聞くことを、訴えていきたい。
さらに、国語では、知識・技能を生徒に意識させることが大切と思われる。そのための振り返りもたいへん重要である。１年の始まりにはなかなか「１時間のまとめ」が書けなかったが、少しずつ書けるようになってきた。１時間の授業の中にどう、振り返りをとるかが課題である。



「本時の流れ」の掲示

参考文献

「平成２８年　中央教育審議会答申」
「平成３０年度　日立市の学校教育」　平成３０年日立市教育委員会
「こんな子いませんか」　平成２５年　日立市教育研究所